



## 欧文報告編集の今昔

海野和三郎

〈〒180-0003 武蔵野市吉祥寺南町4-15-12〉

e-mail: unno@parkcity.ne.jp

最近、欧文報告に投稿した人達に、投稿の理由や意見を求めるアンケートがあった。それに触発されて、昔のことを思い出し、今の人達の参考に供するよう、感想を述べることにする。

末元（善三郎）さんが Managing Editor のときに、私が Associate Editor として欧文報告の実際上の編集をやっていたのは、かれこれ40年ほど前の10年くらいの間ではなかったであろうか。それから、数年 Managing Editor をやり、後を寿岳（潤）さんをお願いするまでが、私の関与したパブリ編集経歴であるが、いま思い出すのは矢張り実際に投稿論文を読み、必要あらば著者と意見を交わし、編集して印刷所にまわし、校正し、発行にこぎ付けた Associate Editor の頃のことである。勿論これらを全部一人でやったわけではない。手当たり次第に、周囲の助手の人達や大学院生に手伝ってもらったのであるが、当時は、投稿論文も今ほど多くはなかったもので、投稿論文にはすべて目を通した。中には、英文の添削で苦勞させられたものもあったが、編集方針は唯一つ、オリジナリティーの有無であった。オリジナリティー皆無で投稿する人はまずないから、編集の苦勞するのは、英文に関する苦勞は別とすれば、あとはオリジナリティーをより多く引き出すことだけである。

今でも思い出すのは、林（忠四郎）さんの有名なハヤシ・フェイズの論文を強引にパブリのために書いてもらったことである。それより少し前、林さんは国際シンポジウムで話し、M・シュヴァールツルドに激賞されたようであった。この論文は、深い対流外層を持った星に Hoyle-Schwarzschild

流の表面条件を付けると出てくるきれいな結果をだした論文で、それがまだ世界的な名声を博する前にパブリが獲得したのであった。

林論文の価値を薄々ながら専門違いの私が理解できたのには訳があった。その頃、清川（当時は林）正男君が修士課程にいて、私が名目上の指導教官であった。その林君が主系列前の星のモデルの計算を Hoyle-Schwarzschild 流ではないもう少し正統的な混合距離理論でやっていたのであった。それが彼の修士論文（和文）であった。林（忠）論文の内容について、その公表前に若い方の林君に言ったかどうか記憶にないが、多分編集の多少の守秘義務のようなものを感じて言わなかったかもしれない。英文にして早くパブリに投稿するようには奨めたが、急ぐことの重要性は私にもよく分かっていなかったし、学生の林君にも分からなかった。そのため、修論は早かったもののパブリに印刷されたのはかなり後になった。

私がパブリの編集業務に携わったのは、いわば、天文学の学術専門誌としてパブリが世界に存在を示した興隆の時期であったように思われる。勿論、例外も多々あったが、日本の天文学も外国直輸入の紹介の天文学の多かった時代から、自前の天文学へと脱皮しつつある時代であった。林フェイズの論文はそれを一段と加速したものである。

やがて、レフェリー制が導入され、手作業編集の時代は終わった。それから三、四十年たって、内容も豊富になり、昨今ではレフェリーシステムも専門別の分業的になってきているようである。レフェリーシステムは世界的に採用されており、その功罪については、先に、E. N. パーカーさんが天文月報にかなり突っ込んだ話を書いている。しかし、そこでの議論以外にも、日本には日本としての特異事情もあって、ここでは日本人の思考形式のある種の傾向が、レフェリーシステムの運用にも影響していることについて、注意を喚起しておきたい。

実は、私も最近まではレフェリー制度は欠点はあるとしてもこれ以外にないものと考えていた。しかし、その考えを少し変えることになった。その議論の発端となる論説を2つ読んだので、まず簡単に紹介しよう。一つは、哲学者今道友信さんの「啖啄」第10号の議論で、criticという言葉に対する日本的解釈についてである。critical readingはレフェリーの役目であることはどこでも同じだが、純粋理性批判という著書名にも現れているように、criticは日本では批評とか批判という意味に受け取っている、という。批判の語源は、身分の高い公卿などが身分の低い能役者などにその芸の欠点を指摘することであったそうで、今でも書評などで欠点を厳しく指摘するのが一般によい書評と思われているのだそうである。しかし、ギリシャ語のクリノーという動詞に発するクリテックは良いものを選び出すときに使う言葉で、物理学や数学の良いところを取り入れて形而上学を学問にするのが「純粋理性のクリテック」で、批判は完全な誤訳だというのである。この西欧の伝統からすると、レフェリーの役目は論文の良いところを見つけ出して、それが少しでもあれば出版を勧告することにあることになる。それに反し、日本のレフェリーは、論文のあら捜しをするのが役目であることになる。西欧のレフェリーがそう理想的に振る舞っているとは到底思えないが、そ

う言われてみると、イギリスやフランスなどの編集ぶりにはいくらかそういう傾向があるような気がする。

第二論説は、科学哲学の森貞彦さんの「日本人にとって科学とは何か」である。彼が日本人の「神話的思考」といっている傾向は、統(制)語論的ともいえるし、官僚的先例主義、マニュアル思考ともいえるが、もっと心の奥底からの傾向で、例えば、天文学というのはこれこれこういう天体に対する、こういうやり方の学問であるという流行の抽象を規範として、ものごとを評価する思考形式のことである。その場合、天文学はあらゆる天体諸現象にあてはまる便利な機械であって、その機械が成り立つ基本をどう変えていくことができるかというようなことは、外国で修正されない限り、自分の守備範囲内では問題にならない。だから、自分の視点以外の視点で仕事をする人が居ると、悪意は無くとも低い評価しか出来ず、その程度の低いと判定した中から出た優れた業績は、本能的に脅威に感じ、理性が働く前に反射的に排除することになる、と説明する。武士は武士らしく振る舞わなくてはいけないし、武士以外のものが武士らしく振る舞ってはいけないと言うわけである。この日本人の性向はベネデイクトが「菊と刀」で論じて以来、今も殆ど変わっていない、というのが森さんの議論である。

以上二つの議論を合わせてみると、日本では、創造的な科学は育たないという結論になる。つまり、「神話論的」に「批評」をする思考のレフェリー制度が日本の科学をダメにしているのである。それでは、それを改良するにはどうすればよいか。我田引水であるが、昔私がやったように、レフェリーは専ら論文のオリジナルティーがあるところを探し出すことを役目にするのである。勿論程度の問題であるが批判はできるだけしないことにして、長所を伸ばし、或いは、間違いがあれば修正を提案するに止めるのがよい。エディターは、少しでもオリジナリティーがある論文は受理

することである。オリジナリティーの低い論文を載せると雑誌の評価が下がり、国際競争に敗れる、という議論があるが、読者の関心は自分にとって面白い論文があるかどうかであって、それ以外の論文の存在はいつでもよいのである。また、違う見方をすれば、一見自分につまらない論文でも次の大発展にとって契機となる可能性もあるのである。出版の容易な時代に、エディターの狭い判断で不受理を決めるのは研究効率の意味で問題があり、論文投稿から受理掲載へのパイプを、程度問題であるが、若干広げるのが適当であろう。

人は八十を越さないと熟さない（玉城康四郎先生談話）そうであるが、以上のことは私の年齢になって漸く分かり始めることで、六十代やそれ以下の人にはなかなか理解できないかもしれない。また、私の言うことがすべて正しいわけではない。何年か後になって、私の言った意味が解ってくれる人があることを期待して、感想を述べた次第である。

異例であるが、上の文に関係の深い文献を以下に解説する。

- 1) C. Hayashi, Stellar Evolution in Early Phase of Gravitational Contraction, PASJ 13, 450-453, 1961. (Received August 28, 1961). L. G. Henyey, R. LeleVier, R. D. Levé, PASP, 67, 154, 1955. による誤った主系列前恒星の進化経路を正した3頁ほどの画期的論文。
- 2) M. Hayashi, Pre-Main-Sequence Stages of Stars, PASJ, 17, 177-198, 1965. それより4年前の修士論文は、天文学教室移転で目下行方不明。見つけた人は御一報下さい。

- 3) 今道友信, 「一哲学者の見た高等教育」, 啖啄 (日本の高等教育を考える会会報), 第10号, 日10年8月. 生圏倫理 (エコエティカ) (講談社学術文庫) は新千年紀の人類のための倫理として必読の書です。
- 4) 森 貞彦, 「日本人にとって科学とは何か」, 1999, 1-50頁 (非売品). 手に入り難いので, 少し付け加えると, 「ベルツの真心のこもった, しかしほとんど理解されなかった忠告の考察」と副題にあるように, 科学 (科学だけではないが) というものに対する日本人の思考傾向を批判した. レヴィストロースのいう「神話的思考」が一般に行われ, あらかじめ計画され進路の定まった生活様式の中にしか安心できない思考の傾向が, 日本発の新しい学問創生を阻んでいるとしている。
- 5) 玉城康四郎, 「悟りと解説 [宗教と科学の真理について]」, 1999 (宝蔵館). 科学者の解脱を要請した遺書であるが, 本題から外れるので, 解説は省略。

### PASJ Editorship, Past and Present

Unno WASABURO

4-15-12 Kitijoji-Minami, Musashino, Tokyo 180-0003

Abstract: Critic against a submitted paper is not the only job of a referee, but more important is the critic for the paper, making efforts to uncover the originality that is sometimes difficult to recognize even to the author. Japanese way of thinking is thought to have the tendency of following current ideas and is warned not to kill new ideas in sciences, in case of referee-ship.